三重県埋蔵文化財調査報告　66

志摩郡阿児町国府

天神遺跡発掘調査報告

1984・3

三重県教育委員会

序

「御食つ国」志摩は、温暖な気候とリアス式海岸に恵まれ、原始～古代より幾多の先人の生活の証しが大地に刻まれている。

今回、県道安乗港線の改良事業に伴い、事前協議の結果発掘調査を実施した天神遺跡も、旧志摩国の中枢部の歴史的解明に多くの資料を提示することとなった。

地下に埋没した埋蔵文化財の保護については、公共事業はもとより民間の各種開発事業の計画段階において、関係機関並びに開発関係者各位の理解と協力をもとめている。一方、発掘調査の成果は、膨大な出土品と調査記録として保管されているところである。

今回の調査は、道路予定部分に留まったが、その周辺部には阿児町指定文化財である国府城跡をはじめとして多くの埋蔵文化財が埋没していることが想定されるため、それらの保護について各関係者の一層の配慮を願うものである。

なお、調査に際し多大の協力を頂いた阿児町教育委員会、国府漁業協同組合、地元国府地区の方々及び県土木部志摩土木事務所に対し、深く謝意を表する次第である。

昭和59年３月

三重県教育委員会

教育長 横　田　猛　雄

例　　言

1．本書は、三重県教育委員会が県土木部から執行委任を受けて実施した一般地方道安乗港線道路特殊改良（第一種）工事事業に伴う、天神遺跡（8GTG）発掘調査報告書である。

2．調査は、次の体制で行った。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県教育委員会事務局　文化課主事　中村信裕

調査協力　　阿児町教育委員会

国府漁業協同組合

地元国府地区各位

3．発掘調査後の整理及び報告書作成は、中村と文化課主査伊藤久嗣が担当した。

4．本書の遺構標示略記号は、下記によった。また、方位は磁北を用いた。

ＳＢ；掘立柱建物

ＳＤ；溝

ＳＫ；土坑

5. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　前　　言……1

Ⅱ　位置と歴史的環境……1

Ⅲ　遺　　構……4

1．Ｂ地区の遺構……4

2．Ｃ地区の遺構……7

Ⅳ　遺　　物……9

1．ＳＫ５出土遺物……9

2．ＳＤ19出土遺物……9

3．ＳＤ１出土遺物……11

4．包含層出土遺物……12

5．試掘調査の出土遺物……13

Ⅴ　結　　語……14

挿　図　目　次

第１図　天神遺跡位置図……2
第２図　天神遺跡周辺地形図……3
第３図　遺構平面図……5～6
第４図　出土遺物実測図……10
第５図　縄文土器・銭貨拓影……13

表　目　次

第１表　掘立柱建物の規模……8

図　版　目　次

ＰＬ１　調査前Ｂ・Ｃ地区近景
　　Ａ地区調査風景
ＰＬ２　Ｂ地区全景
　　〃　ＳＢ２・３　ＳＤ４
ＰＬ３　〃　ＳＤ３
　　〃　ＳＤ５
ＰＬ４　Ｃ地区全景
　　〃　ＳＤ19・20
ＰＬ５　出土遺物

Ⅰ　前　　言

一般地方道安乗港線道路特殊改良工事計画地内における埋蔵文化財の発掘調査は、昭和54年に実施した殿畑遺跡を嚆矢とし今回の調査は２回目に当るものである。この前回の調査時点においても、工事計画地域内の分布調査が実施されたが、県土木部による用地買収後の昭和57年１月には、文化財保護法第57条の３による工事に伴う発掘調査通知が提出され、分布調査結果に基づく第１次試掘調査を同年６月中旬に実施した。

試掘調査は、道路計画内のセンター杭No.13からNo.25に至る延240ｍの間の水田と畑地に２×４ｍの試掘坑10箇所を設定した。その結果、No.14～No.25の間の約1,800㎡にわたって溝･土坑等の遺構と中世土師器・山茶椀・常滑甕・青磁片等が多数出土することが確認されたため、県土木部道路建設課へ第２次調査の必要性があることを通知した。

以後、第２次調査の実施時期をめぐって協議を継続したが、一部の未買収地域の存在等により翌昭和58年８月中旬に県土木部から発掘調査の執行委任が提出され、８月下旬に文化庁長官宛に文化財保護法第98条の２による発掘通知を提出した。以上の経過の後、同年９月１日から11月12日の約２個月半にわたって第２次調査を実施するとともに、11月19日には参加者約40名を得て現地説明会を実施した。

なお、第２次調査については、道路計画センター杭No.16～17をＡ地区、No.18～21をＢ地区、No.22～25をＣ地区と便宜的に呼称し、重機による表土掘削と人力による遺構調査を併行して実施した。調査の結果、南部のＡ地区では遺物包含層・遺構も全体的に認められなかったため、本書では割愛した。

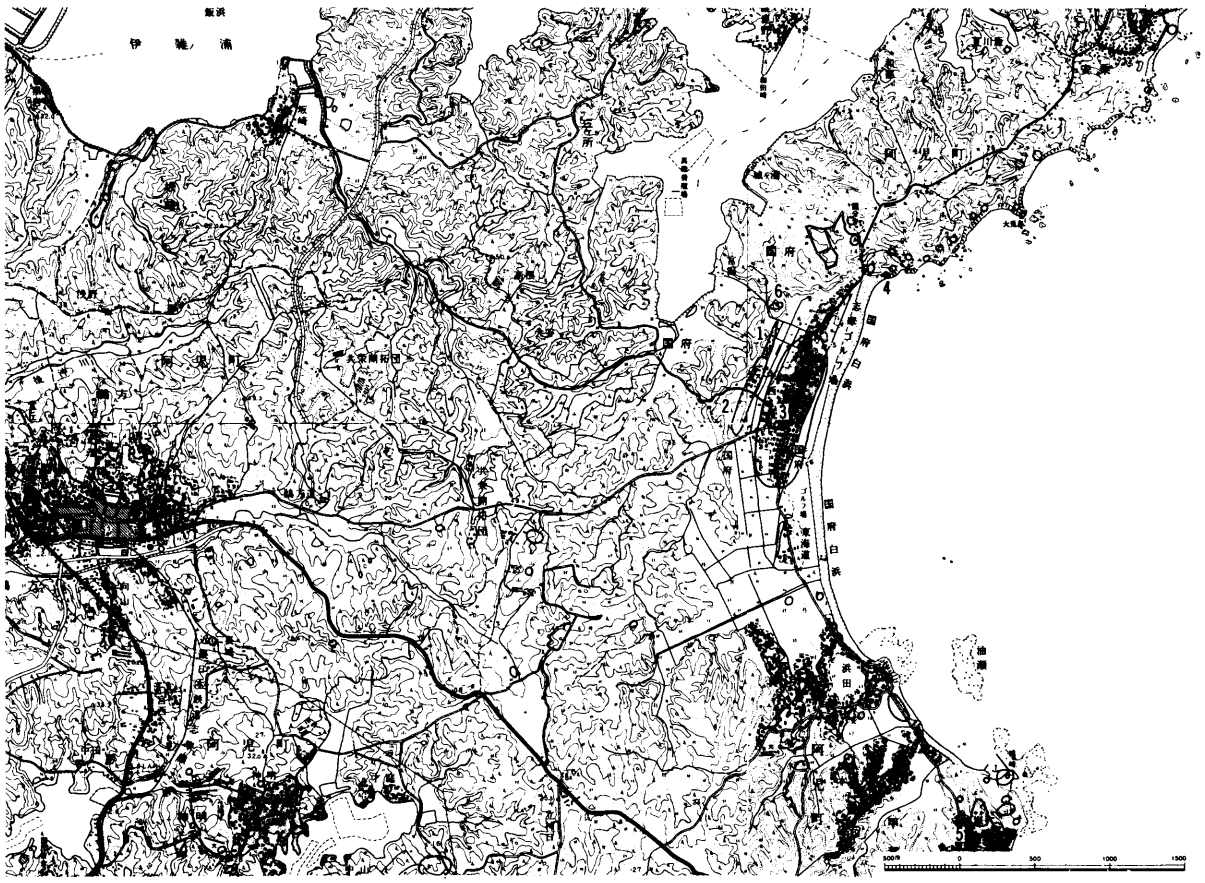
Ⅱ　位置と歴史的環境

天神遺跡（１）は、志摩郡阿児町国府字西海道2095他に所在し、現状地目は水田､畑地､山林であり、標高約2.5ｍである。上述の殿畑遺跡①（２）は、天神遺跡の南方約400ｍに位置し、海岸線に並行した砂堆上に帯状に遺物が散布しており、実質的には同一集落であると考えられる。天神遺跡の北北東約700ｍの丘陵部には、寺域はなお不明確であるが志摩国分寺跡がある。国府地域は、律令制下の志摩国府が置かれた政治上の中枢地域でもあり、東方の国府遺跡（３）も約400*ha*の大集落跡である。

国府地域の開拓の歴史を語る資料は数少ないが、なお旧石器時代の遺物は確認されていない。また、縄文時代についても今回の調査で出土した中期土器が、唯一の資料であるに過ぎない。弥生時代についても、天神遺跡の東北約700ｍの海岸沿いの国府字宇さぎ地内(４)から中期中頃の

土器片２点が採集されているのみである。[2] 以上の如く国府地域の開拓は、弥生時代以前においてはきわめて希薄であるが、ようやく古墳時代後期に至って本格的な様相を呈し始めているものと思われ、志摩地方全般についてもほぼ同様の展開を示しているのではないかと思われる。おそらく可耕地の狭少な当地方にあっては、経済的背景を海に求めざるをえないのであり、ひとたび他地方との交流が活発化し始めると、海を基盤とした展開を指向したものと思われる。

古墳時代後期以降の様相については、古墳群の動向からある程度推測することが可能であるが、なかでも５世紀後半の築造と考えられる阿児町志島に所在の志島古墳群(５)中の第11号墳（おじょか古墳[3]）は、特異な形式をもつ横穴式石室であった。おじょか古墳は、朝顔形埴輪や円筒埴輪を巡らし、持送りの強い板石積の石室内に突起をもつ北九州系の横穴式石室であり、彼我の交流を物語るものと考えられる。一方、志摩半島で確認されている２基の前方後円墳のうち全長32.4ｍの泊（とまり）古墳[4]（大王町畔名）も、内部主体は横穴式石室と推定され、近接する全長30ｍの鳶ヶ巣１号墳[5]も内部主体は確認されていないとはいえ、海を背景として存在した地方首長の築造によるものである。これらの古墳が当地域の南方指呼の地に所在したことは、国府地域の以後の歴史的展開を解明するうえで暗示的である。さらに伊勢湾口の小島にある八代神社(鳥羽市神島町)に伝わる画文帯神獣鏡や、塚原古墳（大王町波切）からも環状乳同鏡が出土し、これらの存在は５～６世紀の畿内政権との政治的交流を窺わせるものであり、特に５世紀後半は大きな画期を形成している。[6]



第１図　天神遺跡位置図（１：50,000）　　（国土地理院　浜島・磯部・波切・安乗１：25,000）

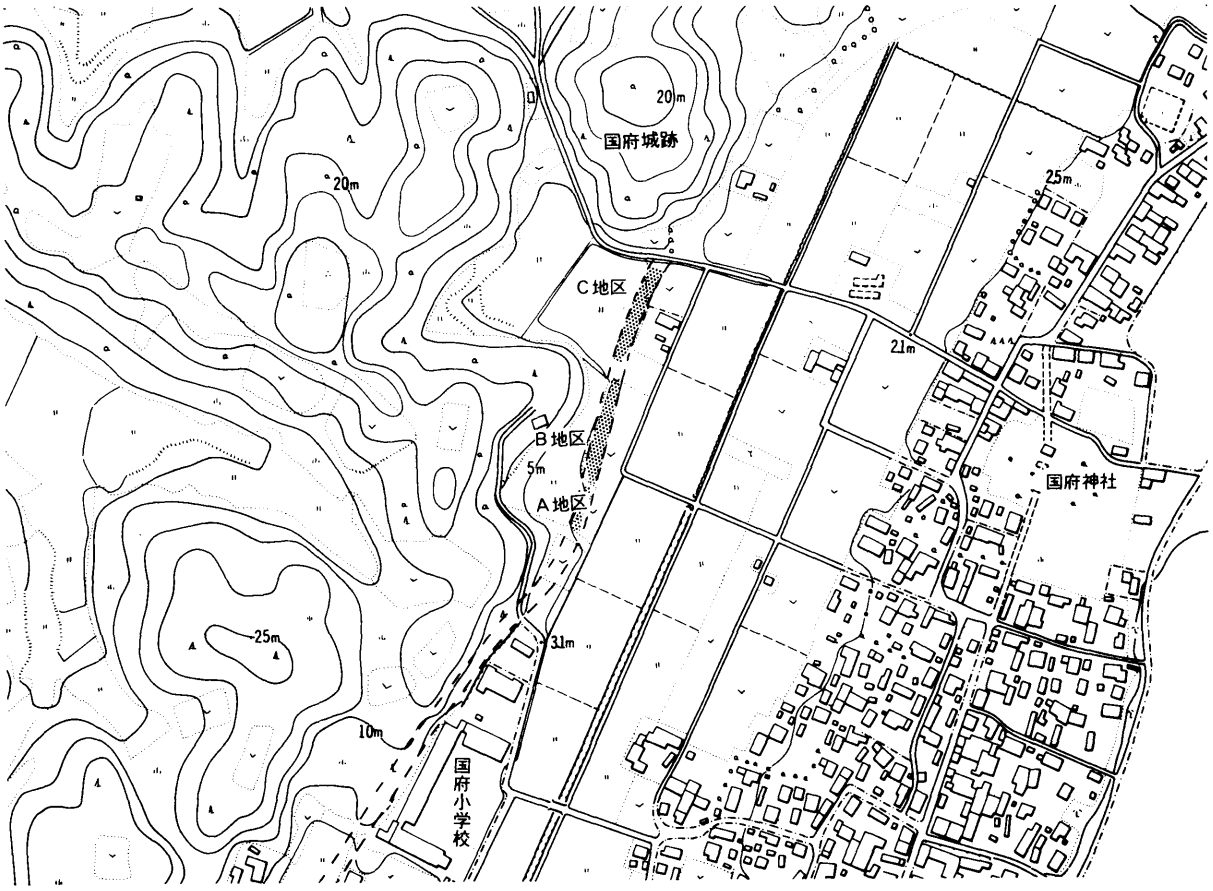
以上の如き在地の有力首長層が築造した古墳とは別に、6世紀後半以降から志摩半島沿岸部に小型円墳からなる群集墳が築造されてくるようになる。殆んどが横穴式石室を内部主体とし、最大約20基程度の群集墳であるが、大半が太平洋岸に分布するとともに答志島や菅島などの島々にも点在し、小規模な海村集落の展開が背景に推定されるのである。

律令制下の志摩地方は、志摩国として志摩・英虞の二郡からなり、平城宮跡出土の木簡にも多数の郷名を遺しているが、朝廷への海産物の調進地域としての位置づけが古くからなされていたことが当地方の特質であり、伊勢神宮や斎宮寮との関係もまた同様であったと思われるのである。

志摩国府の所在地の遺称とされる「国府」の地は、天神遺跡の東側全面にわたっており、既に家屋が建ち並らんではいるといえ、将来の発掘調査による遺構の検出が期待される。同じことは天平13(741)年の聖武天皇詔に基づく国分僧寺、国分尼寺の旧地確認においてもいえるのであり、現在の国分寺周辺への学術調査の鍬が待たれるものである。

平安時代以降の変遷については、文献史料に負う所が大きいが、個々の集落や城館跡の実体については更に詳細な分布調査が必要であり、その意味からもたとえ小規模な古墳や集落であっても看過することができないものであり、国府城跡(6)の解明も急がれるものである。

以上の如く、国府地域の歴史的環境は極めて豊かなものであり、今回の調査はその一端を垣間見たに過ぎないが、地域史解明にとって良好な資料を得ることとなった。



第2図　天神遺跡周辺地形図（1：5,000）

Ⅲ 遺　　構

天神遺跡の基本層序は、第Ⅰ層；表土、第Ⅱ層；明黄褐色砂質土、第Ⅲ層；明褐色砂質土（地山）の３層から形成されている。第Ⅰ層は、層厚20～30cmの耕作土であり、第Ⅱ層は層厚10～20cmで全体に細かい砂礫が混入して固く締っており、山茶椀・土師器・青磁・常滑甕などの小片が出土する遺物包含層で、Ｂ～Ｃ地区の全域に均一的に分布している。なお、Ｂ地区では西側に低い丘陵が迫っているためか、西側からの土砂流入と思われる黒褐色土が第Ⅱ層に混入している部分もあるが、全体に鎌倉時代以降の遺物が撹乱状況で包含されており水害等による二次堆積の可能性が強い。Ｃ地区は現況が水田であり、西側の谷奥からの雨水等による湿田化を避けるためか、第Ⅱ層と第Ⅲ層との間に固く締った黒褐色砂質土と淡黄灰色砂質土が30～40cmばかり堆積しているが後世の置き土と思われた。地山は全体に凹凸がみられるが、Ｃ地区では北へ向うにつれて上昇し、礫を含む固く締った砂層となっているのは、北側の国府城跡を乗せる丘陵の裾が南へ延びていることと関連するものであろう。

遺構は、原則として第Ⅲ層上面で確認できたが、断面観察しえた部分では第Ⅱ層から掘り込まれたものもあり、海浜後背地でたびたびの冠水も想像されるところであり、層位的な把握を究明することはできなかった。なお、本書で割愛したＡ地区では、小ピット２個が検出されたのみであった。

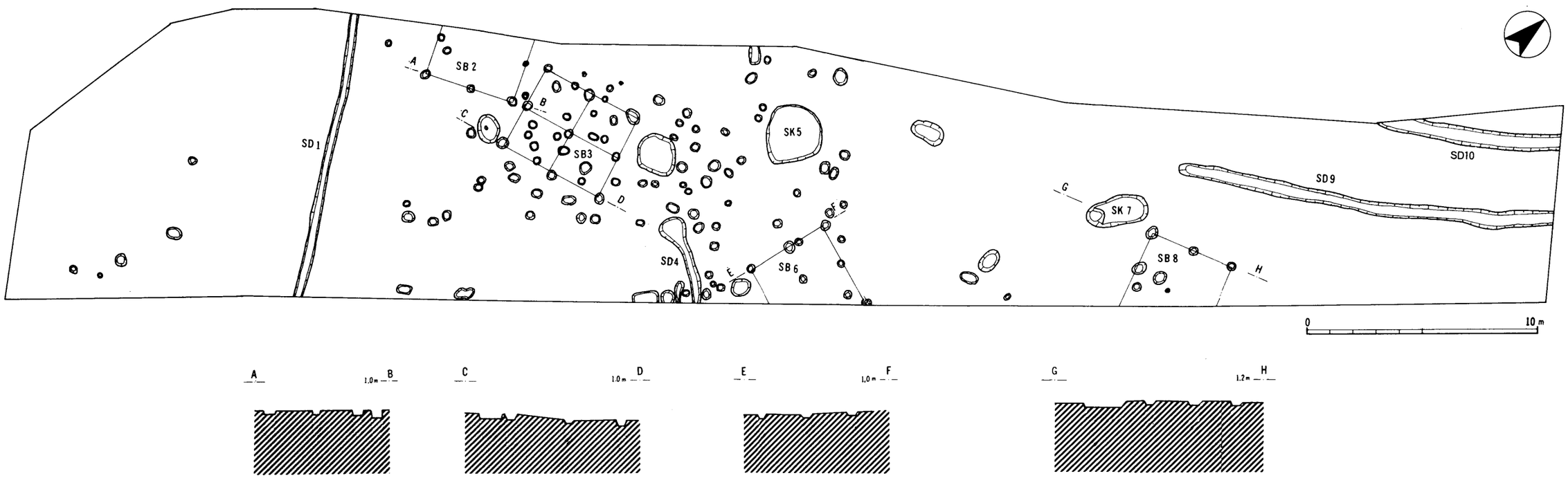
１．Ｂ地区の遺構

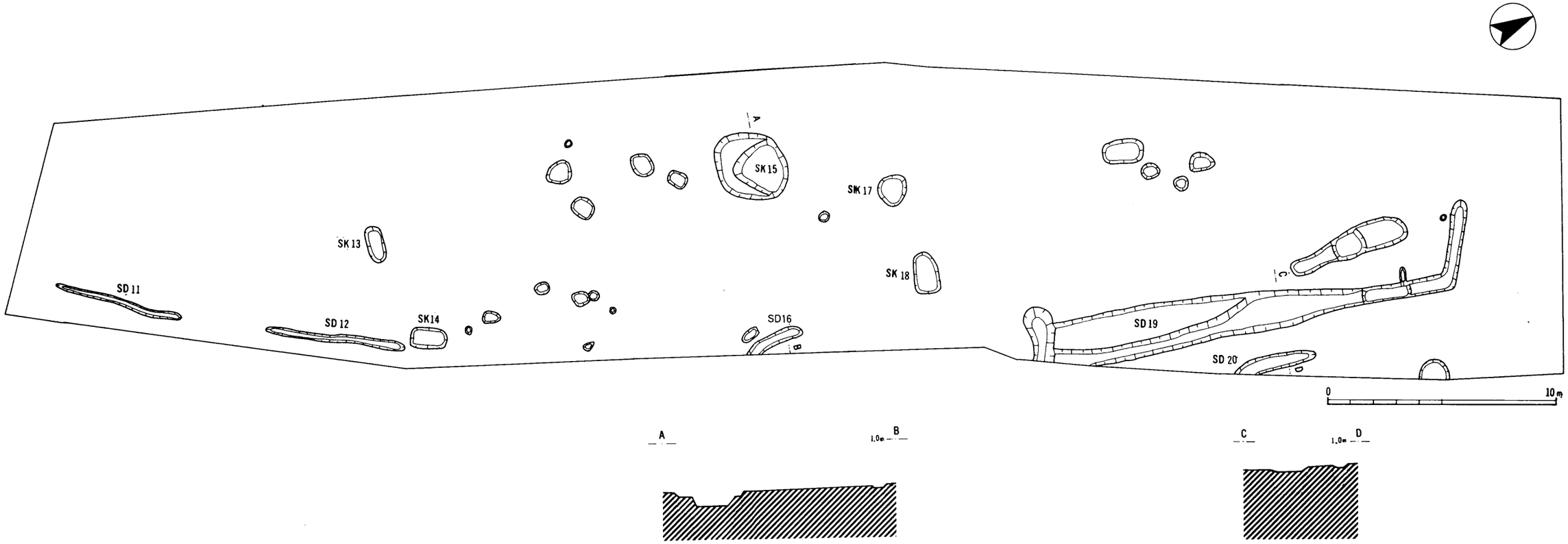
遺構はほぼ全体に検出したが、調査区の西半部で柱穴が集中する他は散在した状況であり、掘立柱建物４棟、溝４条、土坑２基が主要なものである。

１）掘立柱建物

ＳＢ２　検出した掘立柱建物のうち最も西端に所在するもので、ＳＤ１の東側に位置し北側は調査地区外に及んでいる。東西２間（3.9m）、南北２間以上で、柱間はほぼ６尺等間である。柱穴は円形素掘りで、径約30～40cm、深さ約20cmであり、柱穴に伴う遺物は認められなかった。なお、東側第２列目は径約20×15cmの平石を１個置くのみで、掘形はない。

ＳＢ３　ＳＢ２の東側に近接した東西２間（4.6m）、南北２間（3.7m）の東西棟で、中央に床束１個をもつ建物である。桁行の柱間はほぼ８尺、梁行の柱間はほぼ６尺である。なお、南北の桁行柱列に各２個で合計４個の小ピットが並んでいるかに思えるが、ＳＢ３に伴うものかは判然としない。柱穴は大小あるが、平均して径50cm、深さ20cmの円形素掘りで、柱穴内部に川原石を根石として置く例は認められない。柱穴出土の遺物は全くないが、柱穴の集中するこの付近では鎌倉時代に比定される山茶椀・土師器鍋などの小片が多数出土している。





第３図　遺構平面図（１：200）上段：Ｂ地区　下段：Ｃ地区

ＳＢ６　調査区の中央部南側に所在し、南半は調査地区外に及んでいる。桁行は東西２間以上(3.9ｍ以上)、梁行は南北２間（3.7ｍ）で、柱間は桁行が６尺、梁行が６尺等間である。柱穴は円形素掘りで、径約25～30cm、深さ約20～30cmであり、柱穴出土の遺物は全く認められず、根石の使用も認められない。なお、ＳＢ６とＳＢ３との間には多数の柱穴を検出しているが、建物跡としてまとまるものは見出していない。

ＳＢ８　調査区の東北部で他の掘立柱建物とは若干距離をおいて検出したもので、南側は調査地区外に及んでいる。桁行は南北２間以上（3.4ｍ以上)、梁行は東西２間（3.8ｍ）である。柱間は桁行でほぼ６尺強、梁行でもほぼ６尺である。楕円形素掘りの柱穴は、径約40～60cm、深さ約20cmで、根石及び柱穴内の遺物は全く認められない。

２）溝

ＳＤ１　調査区の南部を南北方向に横断する幅約30～45cm、深さ約15～20cmの浅いＵ字溝で、北から南へ緩かに傾斜する。埋没土は黒褐色砂質土の単純層であり、遺物は殆んど出土していない。なお、当溝の東側約 3.5m にＳＢ２の柱列がほぼ平行している。

ＳＤ４　ＳＢ３とＳＢ６の中間部の柱穴群中から始まる小溝で、南側は調査区外に及んでいる。端部は東西約 1.2m 、南北約90cmの楕円形状を呈し、延長部は幅約40cm、深さ約20cmで僅かに屈折して南向するが、Ｕ字状の溝底面は全体に殆んど平坦である。埋没土は黒褐色砂質土の単純層で、殆んど遺物は出土していない。

ＳＤ９・10　調査区の北端に当り、ＳＢ８の梁行柱列に平行するＳＤ９は幅約30～35cm、深さ約15～20cmの浅いＵ字溝で、溝底面は若干の起伏をみせるが殆んど平坦である。西端はＳＢ８の西側柱列の延長部分から始まる。ＳＤ10は、ＳＤ９に約３ｍ間隔をおいて平行するもので、幅約60～70cm、深さ約10～20cmの底面が平坦なＵ字溝である。ＳＤ９は北端が、ＳＤ10は南北両端が調査地区外に及んでいる。埋没土は黒褐色砂質土の単純層であり、山茶椀と土師器鍋・皿の小片が若干出土しているのみである。

３）土　坑

ＳＫ５　ＳＢ６の西側に位置する不定円形の土坑で、径2.4×2.5m 、深さ約20cm、坑底は中央部が擂鉢状を呈して最も深くなっている。埋没土は茶褐色砂質土の単純層であり、山茶椀・山皿土師器鍋・皿・常滑焼練鉢などの破片少量と銭貨（景祐元宝）の破片１点が出土している。

ＳＫ７　ＳＢ８の西側に近接して位置する楕円形の土坑で、径2.7×1.3m 、深さ20cm、坑底はほぼ平坦で、南端に径60cm、深さ10cmの円形ピット状の掘り込みがある。埋没土は茶褐色砂質土の単純層であり、遺物は出土していない。

２．Ｃ地区の遺構

遺構はほぼ全体に検出したが、散在状況を示し、溝５条と土坑５基が主要なものである。

1）溝

ＳＤ11・12　調査区の南端で検出した小溝で、旧状は接続していたものと思われる。幅約30～40cm、深さ約10～20cmで、溝底はほぼ平坦であり、茶褐色砂質土の埋没土中からはなんら遺物は出土していない。

ＳＤ16　調査区の中央部東側に一端を検出したもので、東端は調査地区外に及んでいる。幅約50cm、深さ約25cmのＵ字溝で、なんら遺物は出土していない。

ＳＤ19　調査区の北側寄りに検出したもので、南端は調査地区外に及んでおり、北端は次第に幅が狭くなってＬ字状に屈折している。この屈折部では幅約50cm、深さ約20cmで、南行するにつれて次第に幅を広げ最大幅は約2.2ｍである。最大幅付近で西縁が２段を形成し、最深部で約50cmであり、北から南へ緩かに傾斜している。埋没土は小礫を含む黒褐色砂質土の単純層で、灰釉椀・山茶椀・山皿・常滑焼甕・青磁椀・土師器皿・小皿・土釜などの破片が多く出土しており、調査地域内では遺物が最も豊富であった。

ＳＤ20　ＳＤ19の約１ｍ東側に平行する溝で、南端は調査地区外に及んでいる。幅約60cm、深さ約20cmのＵ字状構で、埋没土はＳＤ20と同様であり出土遺物も類似しているが量的にすくない。

2）土坑

ＳＫ13・14　調査区の南側にあり、径1.5×0.8m、深さ約30cmの楕円形土坑である。埋没土は茶褐色砂質土の単純層で、土師器皿・山茶椀片が少量出土している。

ＳＫ15　調査区中央にある隅丸方形状の土坑で、北側が一段深くなっている。径3.2×2.9m、北側の最深部で深さ約50cmである。埋没土は礫混りの黒褐色砂質土で、山茶椀・土師器皿の破片が少量出土している。

ＳＫ17　ＳＫ15の北側約４ｍにある不定形土坑で、径約1.4ｍ、深さ約30cmである。埋没土は黒褐色砂質土で、少量の山茶椀・土師器類の破片が出土している。

ＳＫ18　ＳＫ17の東側約2.5ｍにある楕円形土坑で、径1.8×1.0m、深さ約30cmで、埋没土と出土遺物はＳＫ17と同様である。

ＳＢ	規模（間）	桁行（m）	梁行（m）	棟方向	柱間寸法(m) 桁行	柱間寸法(m) 梁行	備考
2	―×２	―	3.9	N30°W	1.7	1.8	桁行東側２列目は、平石を使用
3	２×２	4.6	3.7	N70°E	2.3	1.8	総柱
6	２以上×２	―	3.7	N81°W	1.8	1.8	
8	２以上×２	―	3.8	N25°W	1.8	1.8	

第１表　掘立柱建物の規模

Ⅳ 遺　　物

前述の如く、当遺跡の遺構は全体的に少数であり、遺構に共伴した遺物もまた少量であった。出土遺物の総量は整理箱で６箱であるが、その過半が第Ⅱ層の明黄褐色砂質土の包含層中からの出土である。以下、遺構及び包含層出土遺物と試掘調査時出土遺物について概述することにする。

１．ＳＫ５出土遺物

1)　土師器

鍋（１・２）　ともに口縁部破片で、径約25cmである。大きく外反した口縁端部を内側に折り返して横ナデしたもので、内面は肥厚するが(1)は全体に厚手であり、(2)は薄手で横ナデが強いため内面の肥厚した段がシャープである。胎土に粗砂を含み、外面全体が付煤している。暗灰褐色。

皿（３～５）　器壁が約２㎜の薄手皿で、口縁部が直立気味に強く内弯する特徴的な形式である。(３・４)は径13cm、高さ2.8cm、(5)は径11cm、高さ2.3cmで、口縁部の両面は指オサエのあと横ナデし、端部は尖り気味である。底部外面は指オサエのままで、内面はていねいにナデつけている。胎土には小粒の石を少量含むが総体的に精良土を用いている。焼成良好で、灰白色である。

2)　山茶椀・山皿

山茶椀（７～11）　ともに底部破片で糸切底であるが、(７・８)は断面三角形の低く外へふんばる高台を付けたもので、全体に厚味をもつ青白色のものである。(９～11)のうち(9)は高台の痕跡のみで、(1)は高台を付けたかにみえるが高台ではない。ともに粗雑な調整で、胎土に小石を多く含む灰白色のもので、器壁に石粒が噴き出している。

山皿（６）　口径8.2cm、高さ2.7cm。腹部が僅かに膨みをみせて緩かに外反し、口縁部に小さな面をもつ小皿で、高台は粗雑な作りで指オサエのままである。内外面はていねいにロクロ調整しており、内面全体に灰黒色の自然灰釉が付着している。胎土精良で、焼成も良好であり全体に青味がかった灰色である。

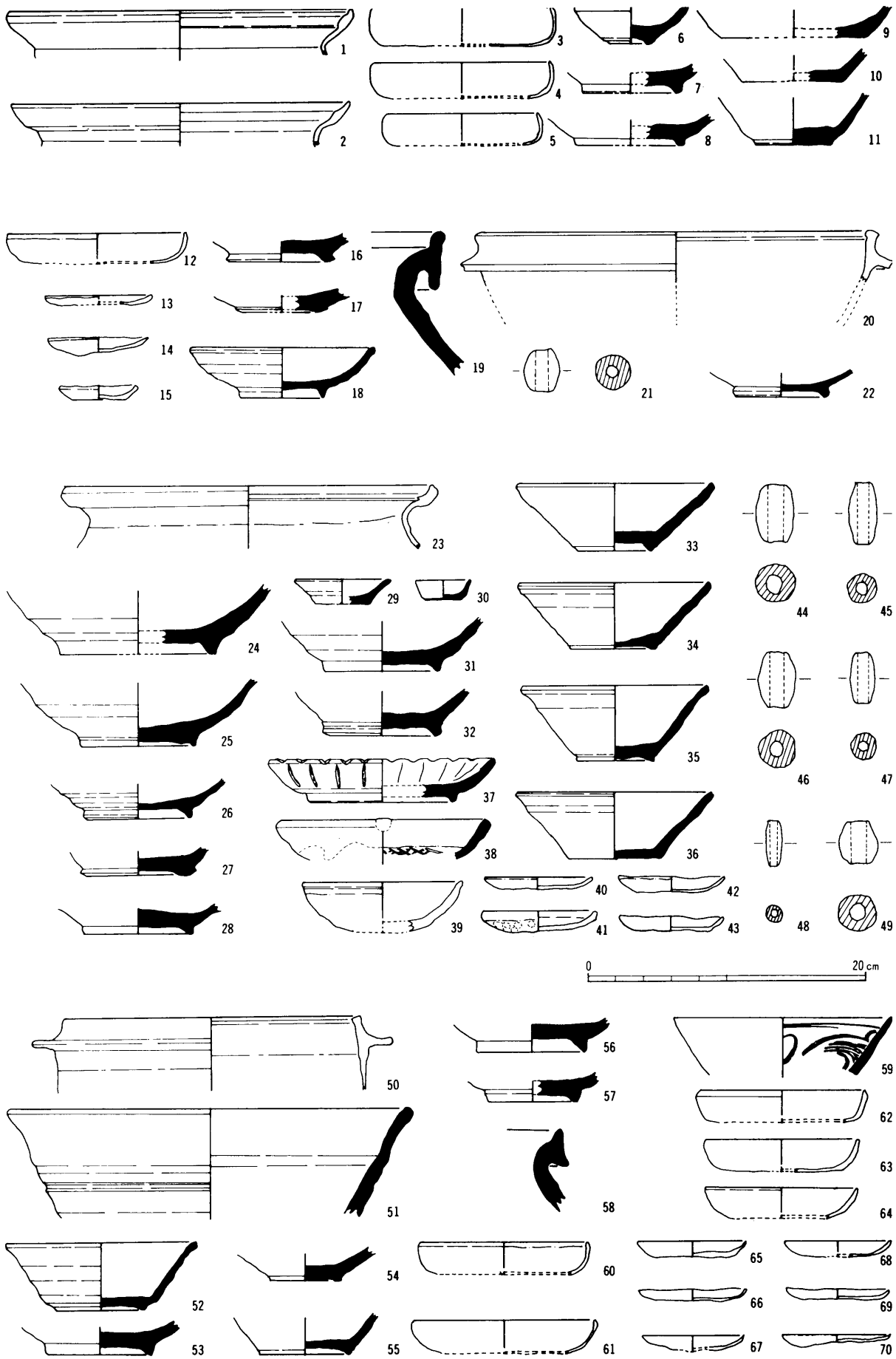
3)　銭貨

景祐元宝（第５図－２）破片であるが復元径2.5cmである。遺存状態が不良であるが書体は篆書体であり、下部の「元」は欠失している。北宋の景祐元年(1034)に初鋳されたものである。

２．ＳＤ19出土遺物

1)　土師器

皿（12・13～15）　２種類の皿がある。(12)はＳＫ５出土のものと同型式であるが、(13～15)は径約５～7.5cm、高さ0.6～1.3cmの小皿である。後者は粗雑な作りで全体に器面が指オサエのまま



第4図　出土遺物実測図（1：4）ＳＫ５（1～11）ＳＤ19（12～21）ＳＤ１（22）

で、凹凸が残り、口縁部で若干肥厚してつまみ上げられている。⑿に比較して胎土に砂粒を多く含むが、焼成良好で灰白色である。

土釜（20）　口径約27cm。直立気味の口縁端部の上部は幅約１cmの面を作り、内側へ僅かに肥厚し、長さ1.5cm、厚さ６mmの太目で端部の角状の鍔がやゝ下向きに付けられている。外面のうち鍔上面までは横ナデされ、下面より以下は指オサエのままであり、内面はていねいに横ナデされている。胎土に小砂粒を多く含むが焼成良好で、淡灰褐色である。なお、外面全体に付煤している。

2)　山茶椀

山茶椀（17・18）　ともに底部破片であるが、⒃の貼付高台は短く外へふんばり、⒄の貼付高台は低平である。いずれも内面の糸切り痕をていねいにナデ消しており、内面もていねいにナデつけている。胎土は精良で、灰白色である。

3)　陶器

平椀（18）　やゝ膨らみながら外反する腹部から丸味をもつ口縁部に至るもので、高台は内傾気味に削り出されている。両面ともにていねいに水挽きされており、内面全体と高台周辺部を除く外面には淡緑灰色の光沢をもつ釉が掛けられ、細かい貫入が認められる。内面には径６cmの重ね焼き痕跡が認められる。胎土は精良で、焼成は堅緻である。なお、口縁部片と底部片は接合しないが、図上復元すると径約13.2cm、高さ約3.6cmである。

常滑甕（19）　口縁部破片で、復元径は約42cmのものである。口縁部はいわゆるＮ字状を呈するがやゝ退化形式で、上下に突出し幅は 3.8cmと部厚い。頸部以下は緩かに外反し、粘土紐の積上げ痕跡が認められる。内外面ともにていねいに横ナデされ、淡褐色の自然釉が全体に薄く発釉している。胎土に小石粒を含むが精良土であり、焼成堅緻である。

4)　その他

土錘（21）　腹部が球形、上下が平坦な形式であるが面はヘラで切っていない。粘土を棒に巻き付けて指オサエで成形したものであり、全体に磨滅している。長さ2.9cm、幅2.5cm、孔径 0.8cm。胎土良好で、赤褐色である。

３．ＳＤ１出土遺物

1)　灰釉陶器

椀（22）　底部破片で、径 5.3cmのやゝ内弯した三角形の貼付け高台をもつ。内面はていねいにナデつけられ、淡灰緑色釉が掛けられており、中央に重ね焼き痕跡が認められる。外面も全体がていねいにナデられているが、底部は右廻りのロクロでヘラによる調整を施している。なお、腹部が欠失しているため、釉の掛け方は不明である。胎土に細かい石粒を含むも精良土を用い、焼成堅緻で、淡灰色である。

4．包含層出土遺物

1） 縄文土器

鉢（第５図－１）　腹部の小破片で、外面は粗い縦位の撚糸文を地文とし、弧状で低平な貼付突帯に棒状具による幅約１cmで斜めの連続刺突文を巡らし、内面はていねいに横ナデされて平滑である。胎土に小石粒を多量に含み、外面に露出しているが、焼成良好で淡褐色である。厚さ7～8mm。

２）土師器

鍋（23）　口縁部破片で、径約27cmである。大きく丸味をもって外反した口縁端部を内側に折り返して横ナデしたもので、頸部は両面とも指オサエの痕跡が残っている。胎土に小石と砂粒を多く含み、外面全体に付煤している。

椀（39）　緩かに外反する口縁端部を丸くおさめたもので、口縁部と内面は横ナデし、外面は指オサエのままである。全体に厚手で、胎土に細砂を含むが焼成良好であり、両面とも黒灰色であるが燻し焼きではない。径11.4cm

皿（40～43）　(41)は厚手で、口縁部を短かく横ナデしてつまみ上げており、内面はていねいにナデつけ、外底部は指オサエのままである。径8cm、高さ1.4cmで、小石を含むが精良土で焼成良好であり、淡褐色である。(40・42・43)は上述の皿(3～5)と同形式で、成形や色調も類似している。

３）山茶椀・山皿類

山茶椀（32～40）　貼付高台の形態によって２分類できる。(34・35・37・38・40)は、径約7cm、高さ5～7mmのしっかりした輪状高台をもち、腹部は膨らみ気味に外反する型式で、(34・35・38) の内面には淡灰緑色の発釉がある。内面は全体をていねいにナデつけられ、底部の糸切り痕をナデ消したものもある (34・37)。(35) を除いて胎土はキメの細かい精良土を用いており、(34・37)を除いて高台に籾痕が認められる。灰色。

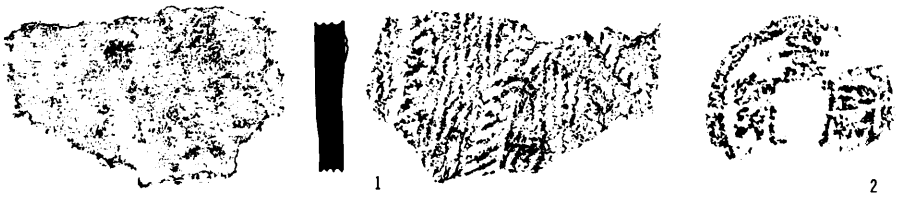
(32・33・36・39) は、低平な籾高台をもつ粗雑な作りのもので、高台径は約5.5～6cmと小さいものである。腹部は直線的に外反する型式で、胎土に砂粒や石を多く含む。淡灰色。なお(39)は、貼付高台が剝落している。

小型椀（30）　径3.9cm、高さ1.4cmのもので、入れ子と思われる。糸切り底の周縁を横ナデして高台を表現しており、底部から直線的に外反して口縁部に至る。口縁部は尖り気味で、内面の見込みには棒状具によるロクロナデが認められる。胎土精良で、焼成堅緻であり、口縁部のみに自然発釉がある。淡灰色。

練鉢（24）　しっかり外へふんばる高さ１cmの貼付輪状高台をもつ底部の破片で、内面は使用のため平滑になっている。腹部下半は右廻りのロクロでヘラ削りする他は横ナデし、底部は未調整である。胎土に小石を含むが器壁には余り露出していない。焼成堅緻で、灰色である。

４）陶　器

第５図　縄文土器（１：２）
・銭貨（１：１）拓影



灰釉椀（26）　底部の破片で、糸切り痕跡が僅かに残っている。貼付高台は短く外へふんばるもので、腹部はロクロ成形の凹凸が目立つ。内外面に灰釉の漬け掛け認められるが殆んど剝落し、灰白色である。胎土は緻密な精良土で、焼成堅緻である。

輪花皿（37）　口径約16cm、高さ 3.1 cm。緩かに外反する口縁部に幅 1.5 cm間隔で切り込みを刻んで巡らせたもので、外面にもヘラ状具による縦位の沈線が巡る。高台は削り出したもので、底部は部厚い。内面と高台を除く外面全体に光沢をもつ淡灰緑色釉がたっぷりと掛かり、細かい貫入が全体に及んでいる。胎土精良で焼成堅緻であり、素地は淡白色である。

卸皿（38）　口縁部破片で、復元径14.6cmである。口縁内側に片口を作る形式で、幅 0.6 cmの面をもつ口縁部から、緩かに丸味をもって底部に至る。卸目は斜格子状で粗密があり、卸目以外の内面と、外面の上半部に淡灰緑色の灰釉が刷毛塗りされている。

５）その他

土錘（44～49）（44）は長さ 4.0 cm、幅 2.5 cm、孔径 1.1 cmと最も大型で、上下は平坦である。砂粒を含み、灰白色である。(46) は長さ 3.8 cm、幅 2.4 cm、孔径 1.0 cmで中央が大きく膨らみ、胎土精良で黒灰白色である。(45) は長さ 4.3 cm、幅 2.0 cm、孔径 0.8 cmで、ていねいにナデつけられている。胎土精良で淡灰褐色である。(47) は長さ 3.7 cm、幅 1.8 cm、孔径 0.8 cmで、全体に細長い。砂粒を含み、淡灰褐色である。(48) は最も小型のもので長さ 3.2 cm、幅 1.1 cm、孔径1.2 cmで、上下端を指オサエで平坦な面を作る。砂粒を含み、淡灰褐色である。これらの土錘は全て磨滅しており、紐孔の周縁も全て小さく破損している。

５．試掘調査の出土遺物

１）土師器

土釜（50）　口径23.2cm。口縁部はやゝ内傾して立ちあがり、内側に小さな面をつくる。(20) にくらべるとやゝ長い鍔をもつ。腹部の内外面をヘラケズリする他は、指オサエと横ナデで調整する。胎土に砂粒を含むが焼成良好で、黄褐色である。

皿（60～70）（60～64）は径11～13cm、高さ約 2.3 cmとほぼ均一な形状で、(62) が口縁部に横ナデによる面を作るほかは、つまみ上げられており、内側はていねいにナデつけ外面は指オサエとナデによるか凹凸が目立つ。胎土に細かい砂粒を含むが精良土で焼成も良く、淡茶褐色～淡灰白色である。(65～70)は径7.2～7.8cm、高さ0.8～1.2cmのもので、口縁部の歪んだものが多い。全体

をナデつけているが、底部は指オサエのままで凹凸が目立っている。胎土等は大型皿と同じである。

2）山茶椀類

山茶椀（52～53･55～57）　上述の包含層出土の山茶椀と同様に2型式がある。(53・56・57）は胎土に砂粒を含むが精良土を用い、貼付けの輪状高台はしっかりと外へふんばる形式である。(52・55）は籾高台の粗雑な作りで高台径が小さくなり、底部から口縁部にかけて直線的に外反する型式である。

錬鉢（51）口縁部破片で、復元径は約29.2cmである。口縁部は緩かに外反し、端部は丸味をもち、両面ともロクロによりナデつけられている。胎土に砂粒や小石を多く含むが焼成良好で、灰白色である。

3）陶器・磁器

椀（54）　底部破片で、低平な削り出し高台をもつ。外面はヘラ削りし、底部は軽くヘラ切りしたままで、内面は暗緑褐色の釉が掛けられている。

常滑甕（58）　口縁部の小破片で、端部が上下に突出したもので(14)にくらべて内傾気味である。粗砂を含むが焼成堅緻で、淡茶褐色である。

青磁椀（59）　口縁部破片で、復元径は約15.5cmである。内面には浅い片彫りのや、退化した劃花蓮華文を配するが、外面は無文である。両面に光沢のある淡灰緑色釉が掛けられている。

V　結　　語

今回の調査は、道路幅に限定された約 1,800㎡を対象としたものであった。試掘調査の結果に基づき調査地区を設定したが、調査の結果中世の集落跡の一端を確認することができた。

出土遺物のうち、遺構に伴うものは僅かであったが、包含層出土のうち縄文土器が注目されるところである。この縄文土器は形式的に中期の船元Ⅱ⑦式に比定されるものであり、岡山県倉敷市船元貝塚を標式遺跡とするものである。本県下に於ける船元式の出土例は少数であるが、山間部の河川流域の河岸段丘に立地する遺跡と当遺跡の如き海岸部に立地する遺跡に分類することができる。とりわけ後者の場合、瀬戸内地方に分布の中心を持つ西日本の縄文時代中期を代表する土器群が、いかなる経路を取って他地方へ伝播していくかを知る上で興味深いものがある。すなわち、主要な伝播経路は瀬戸内海→紀伊水道→熊野灘→伊勢湾岸のルートが推定されるのであり、天神遺跡での出土例は志摩郡志摩町越賀の柳谷遺跡に次ぐものとなり、1点の土器片が語る約4～5,000年前の海上交通の存在がさらに明確になった事実は重要である。

第Ⅱ章で述べたごとく、国府周辺における弥生土器の分布状況もなお断片的にしか知り得ないし、古墳時代以降についても最も古い時代を平安時代の灰釉陶器片の出土で比定することも可能

ではあるが量的に極めて少ないため不確実である。

遺構に共伴した遺物のうち、量的には山茶椀と土師器鍋・皿が多いが、ＳＫ５とＳＤ19出土の山茶椀のうち形式的に若干の混在があるものの時期の下る(10･11･17)は、藤沢編年[8]の７～８型式に比定され、13世紀中～後半頃の年代が与えられる。一方、土師器鍋についてもＳＫ５出土の(1・2)は、新田編年[9]の６類に比定され、14世紀代のものと思われる。また、常滑甕についてもＳＫ19出土の(19)は、赤羽編年[10]の第Ⅲ段階後半に比定され、14世紀後半頃のものと思われる。土師器皿についても形式的に若干の差異が認められるが、なお三重県下全域を視野に包括した編年観が樹立されていないため、この点は資料の集積を待ちたい。

包含層出土遺物のうち、劃花文青磁椀については近年の編年的研究で13世紀前半に集中することが指摘されている[11]が、天神遺跡例では片彫りの蓮葉がやゝ退化形式であることから後出のものと思われる。以上の他、包含層や試掘調査時の遺物を通観すると、天神遺跡の主要な存続時期の幅を13世紀後半から14世紀後半頃と比定することが妥当と思われる。

さて、以上の時期幅における中世集落の展開において今回の調査で検出した遺構は極めて少ないが、掘立柱建物が集中するＢ地区は西側に山地が迫る箇所であり、Ｃ地区は狭い谷筋に面した箇所であり居住空間としては不適当な場所である。

掘立柱建物のうち、ＳＢ２とＳＢ３は接近しているため同時存在ではないが、全般的に棟方向が不揃いであり、殿畑遺跡において検出された棟方向を揃えたまとまりをもつ住居は認められない。ただ、ＳＤ９・10やＳＤ１などの溝は一定の方向を示しており、あるいは居住区画を示すものとも思われ、またＳＤ９・10の空間は通路であったとも思われる。

国府地区には条里地割[12]が明瞭に認められ、N27°Ｅ の方位を示すが、殿畑遺跡の掘立柱建物のうちＳＢ６・７・10の並列した一群の棟方向（N16°Ｅ)はこの条里方位にほぼ近い。この建物群は鎌倉時代前半に比定されているが、今回検出した建物群の時期比定に若干の問題が残るとはいえ、鎌倉時代後半以降から南北朝時代の間とすると、これらの建物群の棟方向は全く統一性を認めることはできない。

海浜部に拓けた中世集落としての殿畑遺跡と天神遺跡は至近距離に位置し、建物やその他の遺構もそれほど格差を認めることはできないが、以上の棟方向の時期による相違は、国府地区の志摩国府としての古代律令制下の地割規制が、中世に至って次第に崩壊していく過程をあるいは物語っているのかもしれない。

なお、包含層出土遺物には、図示していないが室町時代に下るものもあり、平安時代から連綿として集落が営まれていたことを知りうる。殿畑遺跡でも該期の遺物が出土しており、国府地区の西側山沿いに古代～中世にわたる集落の存続を確認することができた。これらの集落が、当地方の中世領主と伝承する三浦氏や戦国時代の造営と思われる国府城跡と如何なる関連を持っていたか、また戦国時代に志摩地方を基盤とした九鬼氏との関係の如何などについては、史料と遺物

のさらなる究明を待たなければならないであろう。

〈註〉

① 新田　洋　『殿畑遺跡発掘調査報告』　三重県教育委員会　1980

② 前出①附篇参照

③ 小玉道明・下村登良男・村上喜雄　『志摩・おじょか古墳発掘調査概要』　阿児町教育委員会　1968

④ 『鳥羽・志摩地区遺跡地図』　三重県教育委員会　1968

⑤ 前出④

⑥ 澄田正一　「伊勢湾沿岸の画文帯神獣鏡について」『近畿古文化論攷』橿原考古学研究所　1963
澄田正一　「伊勢湾をめぐる考古学上の諸問題」『図録三重の考古遺物』　三重の考古遺物編集委員会　1981

⑦ 巽　三郎ほか　『鷹島』　南紀考古同好会　1969
間壁忠彦・間壁葭子　「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号　倉敷考古館　1971
なお、本県下の船元式土器出土の主要遺跡は、以下のとおりである。奥義次氏の御教示による。

- 熊野市曽根遺跡
- 大台町岡ヶ野遺跡
- 尾鷲市釜平遺跡
- 勢和村浜射場遺跡
- 度会町樋ノ谷遺跡
- 嬉野町蛇亀橋遺跡

⑧ 藤澤良祐　「瀬戸古窯址群Ⅰ」『研究紀要Ⅰ』　瀬戸市歴史民俗資料館　1982

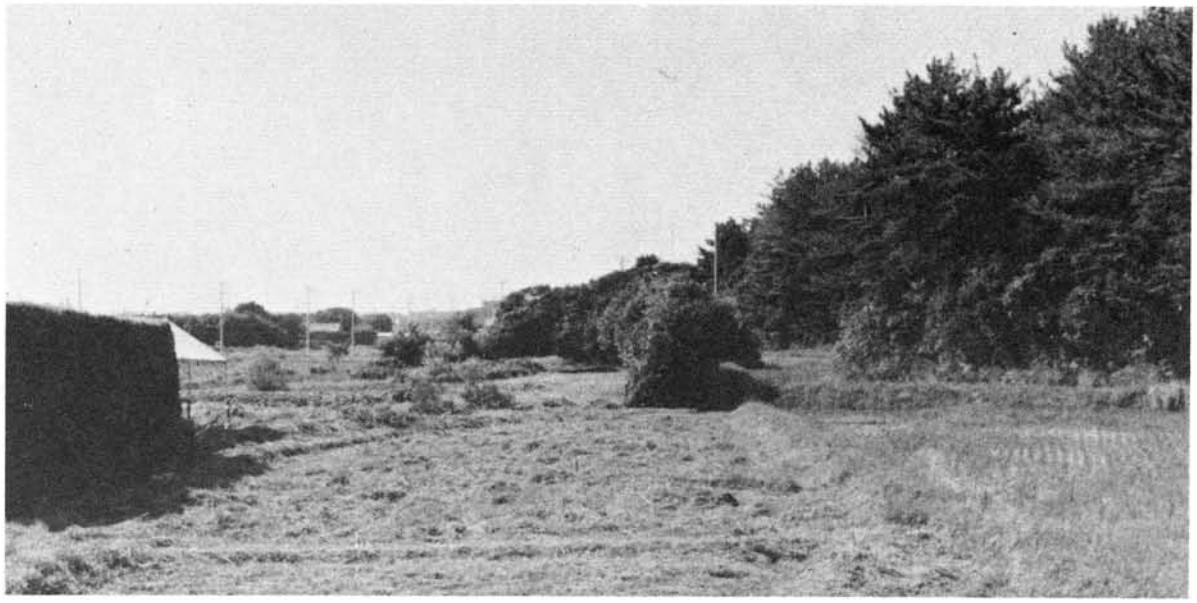
⑨ 新田　洋　「平安時代～中世における煮炊用具―「伊勢型」鍋に関する若干の考察」『三重考古学研究』1
三重考古学談話会　1985

⑩ 赤羽一郎　「常滑」『日本やきもの集成』2　平凡社　1982

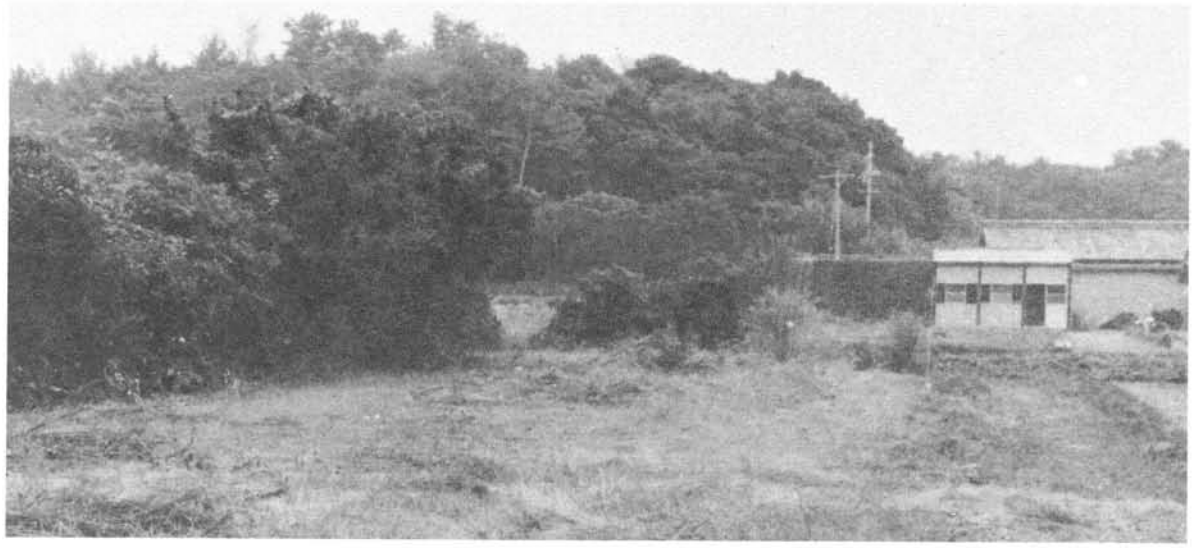
⑪ 鈴木重治　「福田天神遺跡出土の中国産輸入陶磁器の検討」『福田天神遺跡』　龍野市教育委員会　1982
鈴木重治　「中世墓に副葬された青磁椀の検討」『同志社大学考古学シリーズⅠ　考古学と古代史』　1982

⑫ 弥永貞三　「志摩国の条里制」『伊勢湾岸地域の古代条里制』　東京堂出版　1979
なお、地割は長地型で弯曲した海岸線に平行している。方位の測定は、阿児町都市計画図（1：2500）に基づいた。

図　　版



調査前C地区近景（北から）

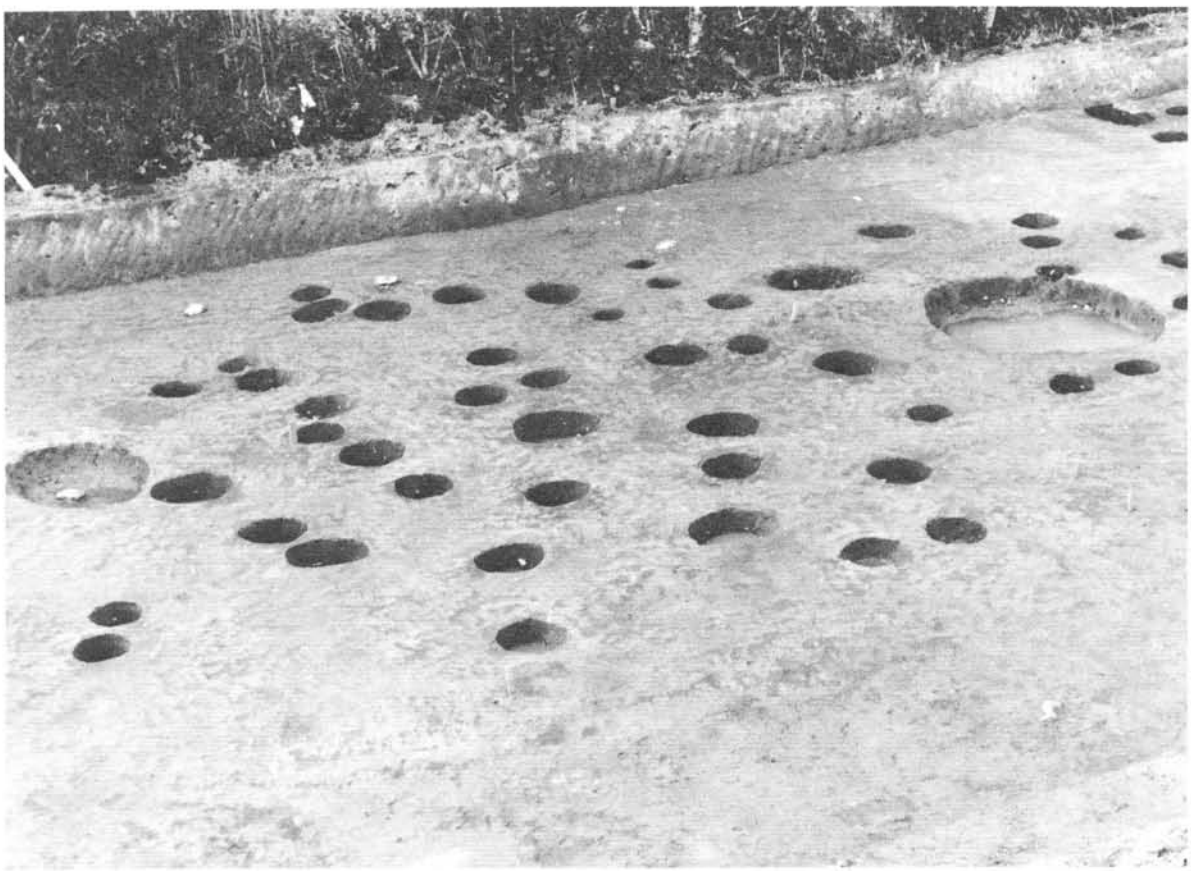


調査前B地区近景　後方の林が国府城跡（南から）

A地区調査風景（北から）

B地区全景（南から）

B地区　SB2・3　SD4（東から）

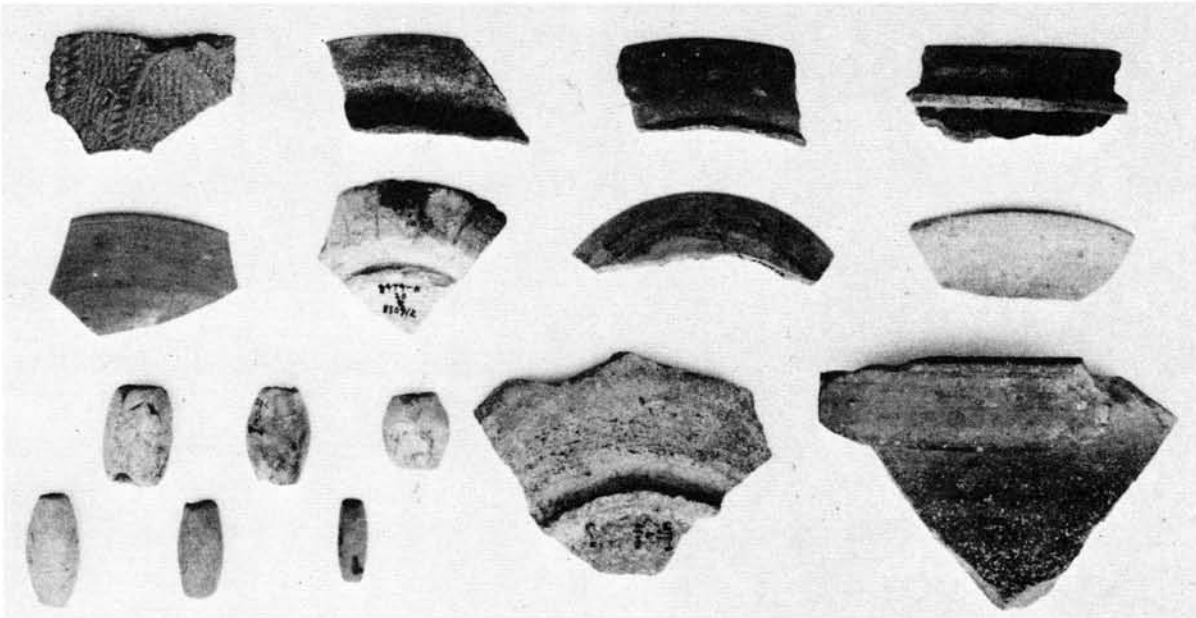


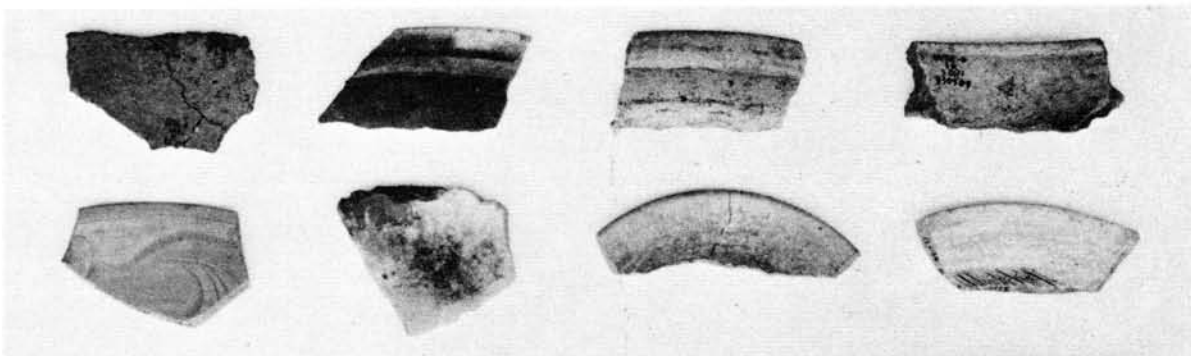
B地区　SB3（東南から）

B地区　SK5（東から）

C地区全景（南から）

C地区　SD19・20（南から）





縄文土器　2　1　50

59　37　18　38

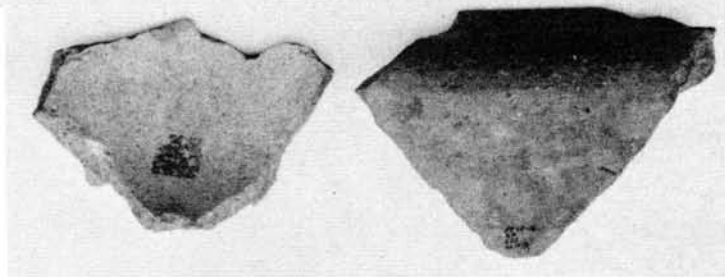
44　46　9

42　19

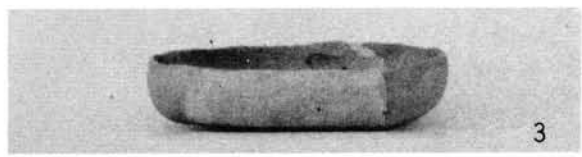
45　47　48

上段——表面

下段——裏面



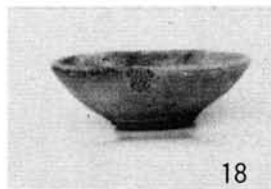
34



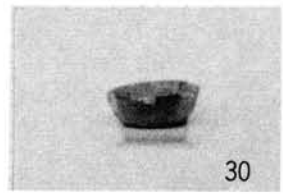
3

68

35



18



30

出土遺物(1/3)

昭和59(1984)年3月に刊行されたものをもとに
平成17(2005)年4月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 66

天神遺跡発掘調査報告

1984年3月

編集
発行　三重県教育委員会

印刷　東海印刷株式会社